

こんな季節が一年中続いてくれれば良いのにと感じるほど、さわやかな新緑あふれる季節です。

現在会員登録数 4,387 人さま。次号は 6 月 20 日発行の予定です／

＋-----◇◆◇ 目次 ◇◆◇ -----＋

【1】お知らせ

【2】コラム

《1》この本読んだ？

《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

《3》子どもの本の珠玉のことば

《4》行って来ました！

《5》宮川健郎 私の出会った児童文学者たち

【3】全国イベント紹介

【4】プレゼント

＋-----＋

■-----■
【1】お知らせ

●「日曜日」シリーズ（田中六大/絵 講談社）の 30 巻完結記念として、著者の村上しいこさんによる小学生向けワークショップと講演会を大阪府立中央図書館で開催します。（学校司書研究会「気になる本を読む会」、IICLO 共催）
◇ワークショップ「「日曜日」シリーズ 村上しいこさんとオリジナル・ストーリーをつくってみよう！」 田中六大さんオンラインゲスト出演

日 時：7 月 20 日（日） 10：00～12：00

対 象：小学生 定 員：40 人 参加費：500 円

※詳細、お申し込みは↓

http://www.iiclo.or.jp/03_event/01_kids/index.html#070720ws

◇講演会「子どもが夢中になる秘密 「日曜日」シリーズ完結を記念して」

日 時：7 月 20 日（日） 13：00～16：00

対 象：大人（中学生以上可） 定 員：60 人 参加費：1000 円

※詳細、お申し込みは↓

http://www.iiclo.or.jp/03_event/02_lecture/index.html#070720lecture

●英語圏児童文学会西日本支部 夏の講演会「英語圏児童文学の翻訳出版 裏話」 講師：上村令さん（児童文学・絵本出版編集者）

日 時：6 月 14 日（土）14：00～16：00

会 場：大阪府立中央図書館 多目的室 参加費：600 円（会員は無料）

主 催：英語圏児童文学会西日本支部（IICLO 共催）

※詳細、お申し込みは→ <https://westcll4.peatix.com/>

●「ご寄付をお願いします」 当財団の運営を応援いただける個人、法人の皆さまからのご寄付を募っています。寄付金は、当財団が行う講座・講演会など、さまざまな事業経費に充てさせていただきます。

※詳細は → http://www.iiclo.or.jp/donation_10th.html

※Syncable（シンカブル）＝継続寄付（毎年／毎月）、単発寄付が選べます。

→ <https://syncable.biz/associate/19800701>

● YouTube 版「本の海大冒険」 <https://www.youtube.com/@iiclol196>

※公開内容一覧は → http://www.iiclo.or.jp/ml_youtube/index.html

● Instagram 随時更新 https://www.instagram.com/iiclo_official/

● X (旧 Twitter) 毎日更新 https://twitter.com/IICLO_News

■-----■
【2】コラム
■-----■

《1》この本読んだ？ Yasuko's & Takeo's Talk

『わたし、わかんない』 岩瀬成子/著 酒井駒子/装画 講談社 2025年4月
対象年齢：小学校高学年以上

* 今回のゲストは当財団理事長の宮川健郎さん（T）です。

あらすじ：小学4年生の少女、中（なか）は、両親が別居中のため、小さい新聞社に勤めながら童話を書くハハと二人暮らし。毎日隣に住む5年生のセンくんと登校するが、学校が嫌いで、校門に着くと、二階の窓から女の子が体を半分のりだして、いまにも飛び降りようとしているのが自分だけに見える。中は、先生に質問されると、よく、「わかんない」と言うが、そのことを級友も先生も笑って、「わかんないちゃん」と呼ばれている。中は、センくんと一人暮らしのおじいさんの家の前でうろうろしている男性を見張ったり、故郷の島で喫茶店を始め、原子力発電所を島に作ることを反対しているチチのところへ遊びにいったりする。

Y：「わたし、わかんない」と正直に言う子どもが学校で受け入れられないという状況のおかしさが描かれていて大いに共感しながら読みました。何でもわかることがいいとされている今の社会への痛烈な批判だと思いました。

T：「わからない」と感じているのが、中だけではなく、ハハの同僚でどの仕事についても自分に向いていると思えない持丸さんや、中とセンくんが出会う宮鈴夫さんなど、「わからなさ」を抱えている大人も描かれていることで重層的になっています。

Y：そういう意味では中の両親も「わからなさ」を抱えて生きていますし、センくんもそうです。この「わからない」という気持ちや、「わからない」という言葉を使うだけでなく、さまざまな言葉で表現されているところも興味深かったです。

T：外から見ると「いい子」で学校でも順応しつつも、そのことを悩み、中をうらやましいと思っているセンくんがいい味出しているなどと思いました。

Y：私は、作家であるハハが作品を書くとき、「頭のなかに小さい種みたいなものが生まれて、それがだんだん大きくなっていくのをまたなきゃいけない」とか、なぜ書くかについて「書くことをとおしででなきゃ、見つけれないなにかを見つけないのかな」などと中に語っているところに、岩瀬さんの声を聞いているようでおもしろかったです。

T：ぼくがおもしろかったのは、「大雨がふって川があふれてしまうと、どんなことが起きるでしょう」という夏山先生の問いに対して、水野さん、川口くんが当てられると、中が、「つぎはきっと川床さんだ」と思うところです。思わず笑ってしまいました。

Y：そういうユーモラスな部分もこの作品の魅力だと思いました。

「わからなさ」とつながって、「待つ」ことの意味もこの作品に流れていると

思いました。中自身も、「わたし、自分もなにかをまっている気がした。そうなの。わたし、ずっとまっているんだ。なにかを。それがなにかわかればいいんだけど、わかんないなにかをまっている。」とっています。

T：センくんと中は、探偵ごっこのように不信人物を見張るという「待つ」という行動をしているし、中は、両親がなぜ、別居したのかを語ってもらうのを待っています。

Y：自分の気持ちが決まるまで待ちながら考え続け、中は最後に大きな決断をします。その潔さがいいなと思いました。そして、それを受け入れる両親もすてきだなと思いました。そのすてきさが、中の頭をなでるという共通した行為で描かれ、中は子どもでいていいんだよと言われている気持ちでしたと思えます。

T：大人の作った環境で生きざるを得ない子どものたいへんさは普遍的なテーマです。中は両親に愛されて居場所があってよかったなと思いました。

《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

第117回「〔手紙（三）〕」

〈ころを修めた〉人

〈普通中学校などに備え付けてある顕微鏡は、拡大度が六百倍乃至八百倍位迄ですから、蝶の翅の鱗片や馬鈴薯の澱粉粒などは実にはっきり見えますが、割合に小さな細菌などはよくわかりません。〉

「〔手紙（三）〕」は、顕微鏡の話から始まります。〈千倍位〉の顕微鏡では、〈下のレンズの直径が非常に小さくなり、従って視野に光があまりはいらなくなるため、〈下のレンズを油に浸してなるべく多くの光を入れて物が見えるようにし〉、さらに〈二千倍という顕微鏡〉になると〈数も少くまたこれを調節することができる人も幾人もない〉と語られます。

最も倍率が高いのは、〈二千二百五十倍或は二千四百倍〉で、見える大きさは〈〇、〇〇〇一四耗（ミリ）〉。一方、人間の眼に感じる光の波長は〈〇、〇〇〇七六耗（赤色）乃至 〇、〇〇〇四耗（堇色）〉なので、〈これよりちいさなものの形が完全に私共に見える筈は決してないのです。〉

〈私共は分子の形や構造は勿論その存在さえも見えないけれども、〈この様な、或は更に小さなものをも明に見て、すこしも誤らない人はむかしから決して少くはありません。この人たちは自分のころを修めたのです。〉と書いてお話は終わります。

肉眼では見えないものを調べるための、科学的なツールとしての実験器具の話をして、最後は宗教的・哲学的になります。科学的に拡大しても見えるものは限られており、すべてのものの本質を見極めることは科学には難しい。でも〈ころを修めた〉人にはそれができると語り手は言います。

では、〈ころを修めた〉人とは誰なのでしょう。釈迦の前世を描く「ジャータカ」を元にした「〔手紙（一）〕」では〈まことの道〉、「〔手紙（二）〕」では〈まこと力〉〈まことのころ〉が描かれていました。本作では、「まことを見る眼」を持つ人、すなわち覚者の目（仏眼・慧眼）を持つ人が〈ころを修めた〉人として描かれているのかもしれませんが。（ペ吉）

（本文の引用は、筑摩書房版『宮沢賢治コレクション2 注文の多い料理店』

によりました。)

《3》子どもの本の珠玉のことば 71

毛虫は、つくえからまどのさんにからだを移動させていた。さっき稔がおいた花のところまでまっすぐにすすみ、もういちどつのをうごかして、ムーン……と鳴いた。

「また鳴いた。あっ、花たべよるんや。」

稔が小さな声でさげんだ。

「ぼくもそうやと思う。」

克彦もうなずいた。

「あっというまにたべるわよ。」

良枝もささやき声でいった。三人はいきをのんで見まもった。

(『ムンジャクンジュは毛虫じゃない』岡田淳/著 偕成社文庫 偕成社
1993年3月 p.52-53 *初版は、1979年8月)

浦河良治との共作『忘れものの森』(ねべりよん(筆者注:共作のペンネーム)/作文研出版 1975年3月)から数えて今年デビュー50周年の岡田淳の単著デビュー作です。転校生の良枝は、のぼるとたたりがあると言われていたクロヤマの頂上で新種かと思われるオレンジの花(クロヤマソウ)を見つめます。そして、その花についていた「ごはんつぶくらの黒い毛虫」をオリーブ荘の物置で飼い始めます。

同じくオリーブ荘に住んでいる同級生の稔と克彦は、良枝の秘密を知って、毛虫をムンジャクンジュと名付け、いっしょに飼うことにします。引用の部分は、3人がムンジャクンジュを観察しているところです。良枝の標準語と稔たちの関西弁がうまくとけあって、3人の友情が築かれている様子がうかがえます。関西弁を使った絶妙な会話のやりとりは、今も岡田作品の特徴です。

3人組は、ムンジャクンジュが25時間に一度、クロヤマソウの花だけを食べ、食べる量は毎回前回の倍になることを発見します。そして、ムンジャクンジュはどんどん大きくなっていきます。3人組はクロヤマソウの花を確保するために級友に声をかけます。最後は、警察まで出動する騒ぎになりますが、ムンジャクンジュは子どもたちによって守られ、姿を消します。

何より、毛虫のようで毛虫でないムンジャクンジュが魅力的です。作者のユーモアにあふれる空想世界の豊かさが感じられます。そして、子どもの正義感の強さ、大人の理不尽さ、環境問題など、現代にも通じるテーマが描かれており、読み継がれてほしい作品だと改めて思いました。(Y)

《4》行って来ました!

神戸ゆかりの美術館で6月29日まで開催されている「サンリオ展 ニッポンのかわいい文化60年史」に行ってきました。「ハローキティ」や「マイメロディ」などのキャラクターを生み出してきたサンリオの60年を超える歴史を、「かわいい」をキーワードに、原画や関連資料、当時のグッズなど数百点の展示物によってたどった展示です。

初期の頃の「いちご」模様のグッズや、水森亜土や内藤ルネ、田村セツコなどの人気イラストレーターの絵を使ったアイテムが展示されていた「“かわいい”のはじまり」、「パティ&ジミー」や「ハローキティ」など、数多くのキャラクターがイラストや制作過程とともに紹介されていた「オリジナルキャラクターの誕生」、「何度も足を運びたくなるサンリオショップ」、「『いちご新聞』はサンリオとファンをつなぐ架け橋」の4部構成になっていました。

1974年に誕生した「パティ&ジミー」や「ハローキティ」が流行した頃に子どもだった私にとってはとても懐かしい空間でした。とはいえ、サンリオのキャラクターは2020年までの60年間に450以上も生み出されているとのこと。消えてしまった多くのキャラクターの中で、なぜ、「パティ&ジミー」や「ハローキティ」が生き残ったのかと思いました。

特に懐かしかったのは、文房具や食器、ハンカチなど様々な雑貨の商品（「ギフト」と呼ばれます）。サンリオショップに出かけて、お財布と相談しながら、長い時間をかけて、自分の欲しいものや、友だちへの誕生日プレゼントを買ったことを思い出しました。ビニール製のケースや、プラスチックの小物入れ、水筒、匂いのついたティッシュペーパー、手鏡など、手に持った重さや感触までよみがえってきました。サンリオのお店で買ったらもらえたプレミアムマスコット（おまけ）もうれしかった記憶があります。

展示では、サンリオが出版社を作って、「詩とメルヘン」「いちごえほん」などの雑誌や、「リリカ」というマンガ雑誌、詩集なども出されていたことも紹介されていました。また、現在も発行が続いている「いちご新聞」の表紙の展示もありました。キャラクターが作られ、そこからそれぞれのキャラクターの物語が作られるという過程が興味深く、大阪府立中央図書館 国際児童文学館で出版物をじっくり見てみたいと思いました。（K）

神戸ゆかりの美術館

<https://www.city.kobe.lg.jp/a45010/kanko/bunka/bunkashisetsu/yukarimuseum/sanrio.html>

【公式】サンリオ展ニッポンのカワイイ文化 60年史

<https://sanriocharactermuseum.com/>

《5》 宮川健郎 私の出会った児童文学者たち 第19回

第5章 古田足日先生

その2 「散文性のかく得」（下の前半）

昨年（2024年）は、古田足日・田畑精一の絵本『おいしいのぼうけん』（童心社1974年）の刊行50周年でした。私が古田足日先生（1927～2014年）に出会ったのは、『おいしいのぼうけん』が刊行された、つぎの年。私は19歳でした。

この連載では、「思い出話」を語るだけではなく、私の出会った児童文学作家や評論家の仕事に対する考察や、さらには、そこから、現代児童文学史のとらえ直しも試みます。ご愛読ください。

<本編はこちらから>

■ ----- ■
【3】全国のイベント紹介
■ ----- ■

●子どもと本の講座「絵本制作の舞台裏」(全3回連続講座)

講師：鈴木加奈子(絵本編集者)

日時：5月22日(木)、6月26日(木)、7月17日(木) 10:15~12:00

場所：北千里地区公民館(吹田市)

定員：60人 ※無料、要申し込み

主催：吹田市立図書館 共催：吹田子どもの本連絡会

上記イベントの詳細およびその他の講座・講演会、展示会、公募情報については、こちらからご覧ください。↓↓

http://www.iiclo.or.jp/03_event/04_other/index.html

※イベント情報をお送りください。当財団HPに掲載させていただきます／

■ ----- ■
【4】プレゼント
■ ----- ■

今号のコラム《1》「この本読んだ？」で紹介しました『わたし、わかんない』をプレゼントします。ご希望の方は、プレゼント応募フォームから、(1)お名前 (2)郵便番号・住所 (3)電話番号 (4)メールアドレス、よろしければ (5)このメルマガのご感想をお書きのうえ ご応募ください。

応募フォーム⇒ <https://forms.gle/uL2TpNhMEYWJpnQ9A>

締切は6月10日(火)、当選発表は発送をもって代えさせていただきます／

編 | 集 | 長 | の | つ | ぶ | や | き |

通勤時の駅までの風景に心が和む毎日です。新学期から早やひと月がたちますが、お父さんと手をつないで歩いていく新一年生もいれば、ひとりで登校するようになった二年生の子どもも見かけます。ブカブカ気味の制服で通学する新中学生もいます。子どもたちの成長の早いこと、思わず目を細めてしまいました。(TA)

みなさまのご意見・ご感想をお聞かせください。下記メールアドレスまでお願いします。

原則として返信はいたしませんのでご了承ください。

●このメールマガジンは、ご登録いただきました皆様に配信しています。

●配信の登録・解除・変更は、

http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/index.html

●このメールの送信アドレスは配信専用です。

●記事の無断転載はご遠慮ください。

発行：一般財団法人 大阪国際児童文学振興財団 <http://www.iiclo.or.jp/>

〒577-0011 大阪府東大阪市荒本北 1-2-1 大阪府立中央図書館内

TEL: 06-6744-0581 FAX: 06-6744-0582 E-mail: office@iiclo.or.jp
